

第34期第15回研究会（第9～13・15回連続研究会）「検証ジャーナリズム 第6回 報道機関の第3者委員会を考える」（ジャーナリズム研究・教育部会、メディア倫理法制研究部会合同企画）終わる

日 時：2015年5月23日（土）14：00～17：00

場 所：上智大学12号館4階 12-402教室

問題提起者：君和田正夫（ジャーナリスト）

山田健太（専修大学）

音 好宏（上智大学）

司 会 者：水島宏明（法政大学）

参 加 者：78名

記録執筆者：音 好宏

ジャーナリズム研究・教育部会、メディア倫理法制部会では、一連の朝日新聞報道の問題に焦点を当て、この問題を題材にしながら現在の日本のジャーナリズムを考える連続研究会「検証ジャーナリズム」を、5回にわたって企画・開催してきた。このシリーズの締めくくりとして、報道機関が設置する第3者機関のあり方について議論をする研究会を開催した。

メディア内で発生した不祥事に対して、メディアはどう向き合うべきか。メディアに求められる独立性の観点から、外部の力を借りることなく、自らの自浄能力で再生を果たすことは一つのありようだが、他方において、その再生の方向性が手前味噌に陥ることなく、社会的信頼を回復するためにも、近年、第3者による検証が求められる傾向にある。今回の朝日新聞問題においても、第3者委員会が設置され、検証と再生に向けた論議がなされた。

そのような経緯を踏まえ、シリーズ企画の最終回となる本研究会では、まず山田会員より、これまでの5回の研究会での議論をレビューする形で報告。その上で、日本の報道機関における第3者委員会の設置とその運用について、その歴史的経緯を踏まえて整理を行った。

この10年あまりのメディア界の様子を見てみると、放送倫理・番組向上機構（BPO）のように放送界全体で常設の第3者機関を設置した事例がある一方で、個別の事案について、第3者委員会を設置する例もある。もちろん、新聞、放送、出版といったメディアの違いによっても、その向きあい方は異なろう。

その上で音会員より、報道機関における第3者委員会による検証の課題、コンプライアンス強化の傾向と、それに伴う報道活動の萎縮の危険性などについて、複数の第3者による調査委員会に参画した際の自らの体験も交えながら報告があった。

その上で君和田正夫氏から、朝日新聞社で編集担当役員などを歴任した経験を踏まえ、経営の立場から見た第3者委員会のあり方、編集現場との関係などについて問題提起があった。俗人的な要因も強いものの、日本の主要大手新聞において、記者出身者が経営トップとなることによって編集の独立性が尊重されている側面があることなど、編集現場の幹部と経営の幹部の両方を経験した方ならではの考察は、報道現場の実際の運営を検証する上で、示唆に富むものだった。

その上で、フロアの参加者を交えての質疑、議論となった。特にディスカッションの時間の後半は、連続の研究会の最終回ということもあり、今回の研究会でテーマとした報道機関における第3者委員会の問題のみならず、これまでの連続研究会での報告、議論を踏まえた現在の日本ジャーナリズムに関する本質的な質疑、議論が多かったのが印象的だった。

なお、この研究会は、上智大学メディア・ジャーナリズム研究所との共催で開催した。